



JA葬祭 通信

地域とともに、ゆたかな暮らしのお手伝い

2014.2月発行 第6号

発行 / 福島県JA葬祭事業連絡協議会
編集 / JAライフクリエイティブ福島 生活事業部 催事課
〒963-0725 郡山市田村町金屋字下夕川原76番1
TEL024 (942) 5078
ホームページ <http://www.jalcf.jp/index.shtml>
お客様相談窓口
(ご意見・ご質問) ☎024 (942) 5078

昨年県内JAでは下記の行事・イベントが行われました ※イベントは抜粋して掲載

7月10日
~11日

JA会津いで総合サービス(株)
まごころ斎苑友の会の集い
湯殿山神社 出羽神社



9月17日
~18日

JA会津みなみ
JA会津みなみやすらぎ友の会研修
浅草寺 増上寺



9月29日

JAたむら
人形供養祭(まごころ)
美山保育園児による
お別れの言葉 焼香



10月19日

JAそつま
人形供養祭(やすらぎ会館相馬)
感謝記念演奏会
ジャズ・イン・トリオによるミニコンサート



11月16日

(株)JA郡山市協同サービス
第4回健康づくりフェスタ(郡山東畜場)
帝京安積高吹奏楽部による
オーブリングイベント



12月1日

(株)JAいわき市協同サービス
人形供養祭JA葬祭事前相談会
(JAやすらぎ会館ラポール平産)
子供和太鼓によるオーブリングセミナー



福島県JA葬祭事業連絡協議会において 【JAオリジナル布張棺 さくら】を製作しました

日本の国花である「桜」をモチーフに、桜の花とJA葬祭マークを融合させたデザインとなっています。女性向けの、優しさの感じられる商品に仕上がっています。



JA葬祭マークと桜の模様を織り込んだ生地



福島県JA葬祭スタッフ接遇コンテスト実施

11月25日にJA伊達みらい みらい斎場ほぼらにて、第6回福島県JA葬祭スタッフコンテストを福島県JA葬祭事業連絡協議会・(株)JAライフクリエイト福島の共催で開催しました。このコンテストは受付担当者と斎場スタッフの接遇マナーおよび式典運営の順応力の向上を目的に①身だしなみ審査、②ご葬儀における受付相談、③式場における告別式の運営を内容として審査を行いました。

各チームとも高いレベルの対応や葬儀運営能力を披露しました。今後このコンテストの成果を生かしJAにしかできない心のこもったご葬儀を執りおこなっていきたいと思います。



最優秀賞 JA伊達みらい

優秀賞 (株)ジェイエイ新ふくしまライフ

優秀賞 (株)JA郡山市協同サービス

福島県JA葬祭事業経営者セミナー開催

11月7日に福島市飯坂「摺上亭大鳥」にて第2回福島県JA葬祭事業経営者セミナーを開催しました。(株)JAライフクリエイト福島 一級建築士事務所の濱尾所長による「小規模施設の取得と現行斎場のダウンサイジング・ビルドとイノベーション」と題した、現在使用中の中・大型斎場を区切ったの小規模複数式場への改修などを提案しました。JA全農本所 メモリアル事業所からは「生命保険のサービス給付への対応」に関する現状報告がされました。

また、6月に横浜全国JA葬祭研究会及びフューネラルビジネスフェア2013が開催され、全国から代表4県の活動報告がありました。福島県からは(株)ジェイエイ新ふくしまライフ催事センターの橋 宏子氏が代表して「JA葬祭を担う女性リーダーたち～組織・営業・サービスの質を高める活動報告」をテーマに発表しました。当セミナーにおいても、橋氏に再び横浜での発表を披露いただきました。



特別講演 心のおくりびと 東日本大震災から2年



講演「心のおくりびと 東日本大震災から2年」と題して(株)桜 代表取締役社長で復元納棺師でもある笹原留似子氏にお話いただきました。

東日本大震災の発生後すぐに被災地に入り津波や火災で大きな損傷を受けたご遺体を、生前の穏やかな姿に戻す「復元納棺ボランティア」に献身されました。現在でも主に被災した子どもに寄り添う活動を続けています。講演では津波で奥様を亡くされた方のお話をお聞きました。笹原氏に復元納棺を依頼した御主人は、あまりに損傷の激しい妻の姿に子どもたちを対面させられずにいましたが、死の事実に向き合わせるためにも、最後に元のお母さんに会わせたいと依頼したのです。時間をかけて生前の面影を取り戻していく奥様を見て、「これでようやく子ども達に会わせることができる」と久しぶりに御主人の表情が和らぎました。

終活について

今話題の「終活」。TVや雑誌など、流行語にも取り上げられ連日のようにこの言葉を聞くようになりました。よって世間での関心も高くなり、全国各地、多くの終活イベント・セミナーが開催されています。

皆さんは「終活」とはどんなものだと思いますか。終活イベントに参加される方はつかみきれない「終活」というもののイメージを少しでも明確なものになればと、糸口を探しに参加をされているようです。

「終活」と聞くと言葉のイメージからしてネガティブな印象を持たれるの方もいるでしょうが、ただ自分が終焉を迎えるまでの準備をすることやそれまでに自分らしく生きるという、終わりに目を向けるのではなく、「いま」をより良く生きるための準備や活動です。前向きな活動として広がっています。

不安や心配ごとは葬儀に関することだけではありません。供養・遺言・健康・保険、さまざまな問題に派生していきます。だからこそ、各地の終活セミナーなどでは関連イベントを盛り込むなどで来場する方々の興味や満足度が上がっています。

また、終活の準備を始める方は、家族や周りの人に迷惑を掛けたくないのですべて自分で準備しておこうという方もいらっしゃると思いますが、是非家族で取り組んでもらいたいと思います。終活やエンディングノートの作成は家族や大切な人へ想いを伝えるものです。

JAではオリジナルの安心準備ノート(エンディングノート)を作成し、事前相談会やイベント時に配布しております。興味をもたれた方、また書き方についてもお近くのJA葬祭会館までお問い合わせください。



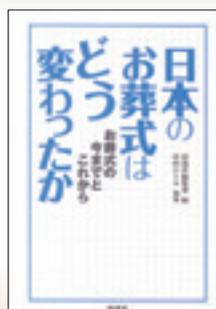
おすすめ図書

お葬式の今までとこれから
中田ひとみ 著
「日本のお葬式は
どう変わったか」

作者プロフィール

中田ひとみ (なかた・ひとみ)

小売業、教育関連産業を中心に活動する
編集者・ライター。東京出身・在住。



JA斎場オープン情報

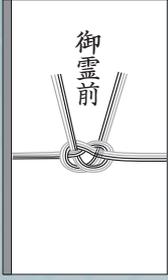
- 平成26年春 ● JA伊達みらい「みらい斎場華蓮」(保原)
● JA会津いいで総合サービス(株)
「まごころ斎苑やまと」(山都)
● (株)ジェイエーサービスすかがわ岩瀬
第2斎場(須賀川)
- 平成26年夏 ● (株)ジェイエー新ふくしまライフ
「JAホールやのめ」(福島)
- 平成26年秋 ● JA会津みなみ 第3斎場(下郷)

●ご葬儀の基礎知識●

●香典袋の表書き 通夜・告別式へ

各宗教共通

お金・品物

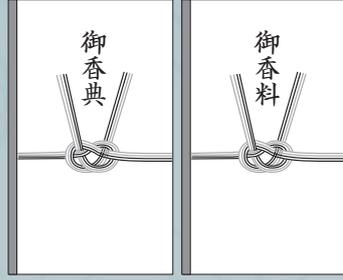


※浄土真宗を除く仏式の通夜・告別式では「御霊前」を使用するのが一般的です。四十九日以降の法事・法要は「御仏前」です。

黒白または双銀などの結びぎり

仏式（浄土真宗以外）

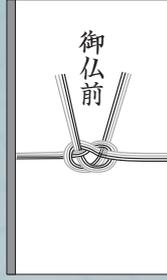
お金



黒白または双銀などの結びぎり

仏式（浄土真宗）

御仏前



※浄土真宗においては、故人は亡くなってすぐに仏様になるという思想があるためこちらを用います。

黒白または双銀などの結びぎり

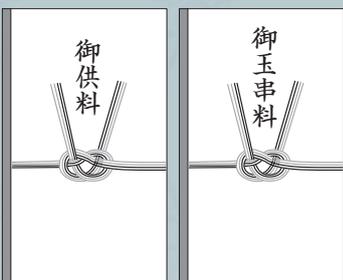
神式

お金・品物



黒白または双銀などの結びぎり

お金



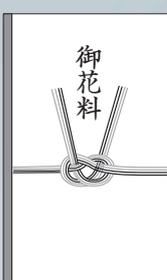
黒白または双銀などの結びぎり

※御玉串料と書くことが多いようです。



キリスト教式

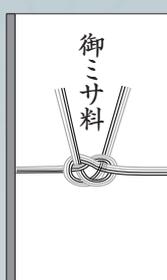
お金



黒白または双銀などの結びぎり

キリスト教式（カトリック）

お金



黒白または双銀などの結びぎり

●香典袋のたたみ方

香典袋を折る場合には、不祝儀袋ですので、左手前に折るのが正式です。

裏面は、上側が下の折られた紙の上に重なるようにします。

香典に用いるお金は、あらかじめ準備してあったことを嫌い、一般的に使用したお札を使いますが、新札を使う場合は、一度折り目を入れて用います。

※上記は一般的な表書きを掲載しています。各宗教、宗派、または地方の慣習によって異なる場合があります。

●葬儀後の会食 葬儀後の会食の意味

火葬後、または葬儀終了後に設ける会食の席を、「精進落とし」「精進上げ」「忌中祝い」「精進落ち」「お斎(とき)」「直会(なおらい)」「仕上げ」などと地方によって様々な呼び方をします。

元来、魚や肉などを食べずに精進した中陰の期間に区切りを付け、日常生活に戻ることから精進落としと言われ、魚や肉などの「なまぐさも」が出されました。本来は、「精進落とし(上げ、落ち)」は四十九日の法要の後のお斎の席を言いました。

今ではこれに葬列を始める前に死者との食い別れの宴席を設けたこと、葬儀後に手伝ってくれた人に御礼の振舞をしたこと、の2つがこれに合わさりました。また各地から集まった人が長い間は滞在出来ないこともあり、火葬または葬儀・告別式後に行われるようになったものと思われます。

初七日法要を繰り上げて葬儀後に行うことから「初七日法要後のお斎」と呼び、これを簡略化し「初七日」と言うこともあります。

大きく分けて2つの意味

1. 僧侶などの宗教者、受付や帳場等手伝ってくれた方(近隣・会社関係者)への感謝とねぎらいの席
2. 美味しい食事とともに故人の思い出を語り、偲ぶこと

現在の宴席はいくつかの意味が合体したり、変容したものです。現在の意味で捉えれば「感謝の会(席)」「偲ぶ会」という表現になるでしょう。

参考文献:増補三訂『葬儀概論』碑文谷 創 (株)表現文化社

詳しくは

(株)JAライフクリエイティブ福島
HPをご覧ください。

<http://www.jalcf.jp/index.shtml>

JAライフクリエイティブ福島

検索

